親鸞の仏性観

三明智彰

親鸞の仏性観は、いかなるものか。また、親鸞は仏性によってどのようなことを表わしたのか。

仏性は、「仏のあり方」を最も原初的には意味している（涅槃経）。そして、仏教教理史上、様々な見解が提出されてきた。

真宗の宗学においても、親鸞の仏性説については多くの発言がなされており、諸説あるが、それらは主に、天台の三因仏性説（正因・了因・縁因）や、法相の二仏性説（理・行）等を基準として、それに照らして親鸞の仏性説を解釈するという態のものであった。問題は、本有の仏性を肯定するか否定するか、信心は三因仏性のうちどれに相当するか、等等であった。それらは聖道門の教理をはじめから肯定して、それで以て親鸞の教学を解釈しようとしてきたように見える。それでは、親鸞の教学を明らかにしようとしても無理があるように思われる。親鸞が廃棄した教理体系を以て、親鸞の教学を解釈・会通しようとすることは正当ではない。親鸞の教学の営みは、法然の選択本願念仏の教えとの出遇いと、それに対する弾圧とをくぐってなされたものであり、聖道の教理体系や為政者の政治感覚に対するいわば闘いの営みであったのである。

『選択集』の冒頭に「一切衆生に皆仏性があり、遠劫より多くの仏に値っているはずなのに、なぜ今日まで生死に輪廻して火宅を出ないのか」という問いがある。この問いは、大乗・一乗を名のる仏教である限り「一切衆生悉有仏性」ということを語らぬものはないけれども、それは果して自明のことか、実際に「悉有仏性」ということが実現されているかという、空理空論に堕した聖道門仏教に対する告発であった。当今の末法五濁悪世には、ただ、選択本願念仏の浄土の一門のみ、一切衆生の平等成仏の道であると、法然は宣言したのである。「一切衆生悉有仏性」ということは、一切衆生が平等に成仏するということを一応示すものであるが、そのことが実現されるのは、選択本願に立つ念仏を根本の行業とする以外にない。これによって、衆生は一切の差別なく成仏すると示したのである。法然は、行の廃立（念仏を取って余行を捨てる）を通して、称名念仏の徹底を以て一切衆生の平等成仏という課題にこたえたのである。

親鸞は、法然の教に出遇い、弾圧をくぐって、選択本願念仏の仏道の普遍性の公開を、『教行信証』という教学の営みによって果した。親鸞が仏性に着目したのは、法然以前への退転に見えるかも知れないが、そうではない。「一切衆生悉有仏性」という仏陀の教言に如来の悲願招喚の声を聞いたのである。

仏性説については、『教行信証』では、「行巻」一乗海釈、「信巻」至心釈・信楽釈・逆謗摂取釈、そして、「真仏土巻」に『涅槃経』が引用されている。親鸞の仏性観は、その引用された文と前後の文脈からうかがうべきである。しかも、『教行信証』は、全体が有機的に働く生きた書物であるから、各部分ごとに考えるだけでは不充分である。また、引用された文の『涅槃経』全体における意義についても視野に入れておかねばならないので、たやすくできないことである。試みに述べれば、「行巻」では一乗海釈の所に引かれており、選択本願念仏は誓願不可思議なるが故に至徳を成就する「誓願一仏乗」であるとする。この誓願一仏乗と

は仏の所説であり魔説に非ず、唯一の真実である。仏性は、誓願一仏乗の根拠であり、また、誓願一仏乗によって達成されると示されている。親鸞は、念仏成仏の仏道が誓願の故に普遍であり真実であることを誓願一仏乗と言う。

ただ誓願一仏乗――念仏成仏これ真宗――に、一切の衆生の平等成仏は成就する。その真実普遍の救済の法の働きは、それを領受する信心によってのみ確証される。明らかに自覚自証する信によって、誓願一仏乗の法は証明される。その信心を明かすのが「信巻」である。信心は、衆生の自力によって得られるのではない。如来の願心によって発起するのである。この点で仏性ということは深く関わる。至心釈を見ると、『涅槃経』を引いて至心は如来の真実心であり、真実とは仏性である、と述べられている。この真実心の現行が法蔵菩薩永劫修行という選択本願念仏の行である。信楽釈では、「大慈大悲大喜大捨が仏性であり、大信心が仏性であり、一切衆生を一子の如く愛する一子地が仏性である」と言われる。このように、如来が真実であり、大慈大悲であり、大信心であることが仏性で以て示されるのである。さらに信巻末では、阿闍世に代表される一切の造罪者が、如来の大悲に摂護されてあることを語る。如来の衆生に対する絶対的信が示されている。煩悩に覆われて仏性を見ることができないという痛みに、如来の無限の大悲が感得されるのである。

「真仏土巻」には、大涅槃が常住大楽純浄であることと、衆生が未来に仏性を必ず顕すこと十住の菩薩少分仏性を見ることが述べられている。真仏土は、無為涅槃界であり、衆生の故郷であり、如来の無縁の大悲を性とし大悲の願行に酬報した土である。惑染の煩悩具足の衆生も本願力の回向に由るが故に必ず仏性を顕すとされている。

以上、「行巻」「信巻」「真仏土巻」に仏性に関係する『涅槃経』の文が引かれているのであるが、「行巻」「信巻」では、端的に言って、本願力回向の行信の根源に仏性を指し示しているのである。この行信に証知される境界が真仏土である。現生の行信に於て、仏性を顕すことを畢定当得のこととして先験し確信するのである。そしてまた、真仏土はこの本願力回向の行信の根源である。この衆生の行信は、本来衆生のものではない。衆生の行や信でもって如来の浄土に生ずるのなら畢定当得とか必至滅度とは言えないのである。如来の浄土に生ずるのは如来でなければならない。したがって、如来が如来であることを失わずに衆生の行信となるのでなければならない。その行信となる大悲心を法蔵菩薩と言う。真実の行信に帰命すれば摂取して捨てたまわず、故に阿弥陀仏と名づけたてまつる（行巻）と、「行信に帰命する」とあることが一つの証左である。

親鸞の仏性観は、如来選択の願心に根拠をもつものである。如来の願心が成就する一心は、したがって如来の心という義を持つ。「是の心作仏す、是の心是れ仏なり。是の心の外に仏ましまさず」（信巻）と言われる所以である。親鸞の言う信心は、自力の戒定慧といった修行の前段階ではない。また、三因仏性の範疇に収められるものでもない。法蔵菩薩の心なのである。

仏性によって親鸞は、如来出生の事実を示す。衆生貪瞋煩悩中に能く生ずる如来＝法蔵菩薩を表わすのではないか、と考えるものである。